日本醫史學雜誌

第9巻　第3・4号

昭和37年3月31日発行

原　　著

日本眼鏡史の研究……福島義一……(71)

総会発表要旨

第61回日本医史学会総会一般講演要旨

(昭和35年5月15日，東京大学医学部本館小講堂において開催)……(81)

第62回日本医史学会総会一般講演要旨

(昭和36年11月11・12日，京都市立植物園会館講堂において開催)……(88)

雑　　報

学会刊行物一覧……(87)

編集後記……(94)

通巻　第1353・4号

日本医史学会

振替口座　東京15250番

第61・62回日本医史学会総会一般講演要旨細目

偽書「薬経太素」と和気広世……石　原　　明…(81)

「家法難波骨継秘伝」について……蒲　原　　宏…(81)

明治初期医学校の教科書について……阿知波五郎…(82)

ベルツ博士の序文のある著書
— 江馬賤男の「新薬説約」について……安　西　安　周…(83)

「蘭館日誌」中のシーボルト関係記事について……大鳥蘭三郎…(83)

小石元俊著「背部十対二十穴図」について……大　塚　敬　節…(84)

アルバート・ウイリス（帰化名宇利有平）のことども……鮫　島　近　二…(84)

広島における蘭学の始祖中井厚沢……赤　松　金　芳…(84)

大阪町人の合理主義と西洋医学への理解……中　野　　操…(85)

和蘭伝来ルザラシについて……伊良子光義…(85)

蘭方製薬史（第4報）……宗　田　　一…(86)

日本における膵臓の認識（予報）……矢　数　道　明…(86)

記主禅師の看護観……杉　田　暉　道…(86)

Avicennaの“医術の詩”について……巴　陵　宣　祐…(88)

東西医学の源流と交流……三　木　　栄…(88)

「医家千字文註」が中世医学に占める地位について……石　原　　明…(89)

中華共和国における最近の李時珍研究……石　原　　明…(89)

「杏隠斉正骨要訣」について……蒲　原　　宏…(90)

京都における駆梅用水銀剤製造研究史
— 蘭方製薬史第5報 —……宗　田　　一…(90)

「蘭館日誌」中に見られるいわゆる
シーボルト事件関係記事について……大鳥蘭三郎…(91)

幕末における外国船々員患者の治療について……中　野　　操…(91)

福沢諭吉と蘭学事始……内　山　孝　一…(91)

わが国における初期結核療養所……長門谷洋治…(92)

尾州藩医浅井氏家譜大成と浅井系図について……矢　数　道　明…(93)

野口英世の邦文著書「十二指腸虫病」について……安　西　安　周…(93)

日本放射線医学史上における室馨造と福田雋一の業績……今　市　正　義…(94)

日本眼鏡史の研究

福島義一

（一）

眼鏡は、何時頃、そして誰れが発明したものであらうか？

この様な疑問は、日常余りにも慣れ且つ親しんでいる眼鏡装用者にとつては、恐らく誰れでも一度は抱く疑問であらうと思う。

しかし、現在のところ、この解答は残念ながら余り完全なものではない。

即ち、一三世紀の終り頃（一二七〇—一二八〇）、当時のガラス工業の中心地であつたミラノ（伊国）附近に於て、誰れかが凸レンズを発明し、之れを眼前に装用する工夫を加えて所謂古式眼鏡を作り出し、その製造販売をはじめたものらしい（一三世紀の終とか、一四世紀の初め頃）。

尚お、史書をひもどくと、例えば、Richard Wallingfrom（一二九二—一三三六）、Roger Bacon（オックス・フォード・フランチェス派の僧正 一二一四—一二九四）、Salvino d'Armati（Salvino degli Armati とも書く、フローレンスの貴族。一三一七歿）、Alexander de Spina（Alessandro de Spina とも書く、一二九〇年頃の人）などが、何れも眼鏡の発明者に擬せられている。

中でも、Salvino d'Armati は、古いフローレンス案内記（一六八四版）に、St. Maria Maggiore 寺院内に彼の墓石があつて、その墓碑文の中に彼が眼鏡の発明者であると刻まれているといい、また、Alexander de Spina は、Pisa 修道院古文書の中に、彼の友人の手記が保存され、その中に彼が眼鏡を発明したと書いてあるという。

しかし、この程度の史料から、その発明の栄与を何れの

個人にも与えることは困難であろうと思われる。

現代の眼鏡は、その構成要素からみて二部分から出来ている。即ち、視器の屈折異常を矯正する部分（レンズ）と之れを眼前に保持する部分（枠、フレーム）とである。勿論、眼鏡は是等の二部分を分離しては成立しないわけであるが、その発達変遷の過程を知るためには、レンズとフレームとを別けて考える方が都合がよいと思う。

（二）

レンズは、ガラス、水晶、時には貝殻などから作られたが、眼鏡レンズの大部分はその加工の便利なガラスが主材として使用されている。

さて、ガラスの発明者は誰れか、この疑問も亦容易に解決することが出来ない。

しかし、古代の考古学遺物から考えると、古代エジプトに於て最も多く、且つ、優秀な作品が発見せられている。諸説はあるが、恐らくその基源は古代、エジプトであろうと思われる。

古代に於て、珍奇とせられたガラスの製造技術は、古代エジプトから、古代ギリシヤ更らに、古代ローマ帝国と伝えられ、更らに、この工業は当時のベネチア共和国に於て栄えた。恐らく、この頃に於て凸レンズとそれを使用した眼鏡が発明せられて、やがて眼鏡の製造販売が始まつたものであらう。凹レンズの発明は、はるかにおくれて一五世紀の終りか或は一六世紀の初め頃と考えられている。

さて東洋では何うであろうか？

古代中国に於ては、ガラスを瑠璃と呼び、既に西紀前一一二世紀（前漢時代）に西域地方から伝来されたと云うが、考古学的遺物から考えると、その伝来は更らに古いものと推定される。四世紀には吹きガラス器が伝来し（晋時代）、更らに、五世紀にはガラス製造が始められた（北魏時代）。

八世紀（盛唐時代）になると、非常に優秀なガラス器が製作されているが、それでも地中海沿岸地方産のガラス器に較べるといささか見おとりがする。

それで、ガラス器を愛好した中国人は、遠く地中海沿岸地方からアジヤ大陸を横断して、即ち、主として『絹の道』を通つて長安の都までガラス器を搬ばした。そして、後述する様に、その一部分が波荒きシナ海を渡つて無事奈良の都へたどり着いて、正倉院その他に世界の驚異として

現存している次第である。

次ぎは、ガラスの日本伝来であるが、弥生式遺跡からガラス玉が発見せられ、九州地方の原史時代古墳からガラス材料（板）とガラス製玉類が発見せられている。

ガラスの日本伝来も、恐らく朝鮮半島から先史時代に既に始まつたものであろう。ガラス材料が発見せられているから、玉類は原史時代に国産され始めたのであろう。

其後の史料を述べると、仁徳帝陵（四世紀）からガラス製のツボとサラとが発掘された記録があり、安閑帝陵（六世紀）から白色ガラス器（琉璃器）が発見せられ（現在国立博物館所蔵）、また、文弥麻呂（七世紀の人）墓発見の緑色ガラスツボ（骨灰を収めた容器）も甚だ秀作品である。

八世紀に至ると、我国ガラス史料は甚だ豊富になり、その大部分が奈良正倉院に所蔵せられている。近く、奈良唐招提寺から白色ガラス器（舎利壺）が発見されたが、之れも唐僧鑑真和上がはるばる中国からもたらしたものであろう。

大宝令（七〇二）をみると、大蔵省に典鋳司（いもじのつかさ）が置かれ、国産ガラスが製造し始められたらしいが詳細不明である。

其後、ガラスは外国、主として中国から輸入せられていた。

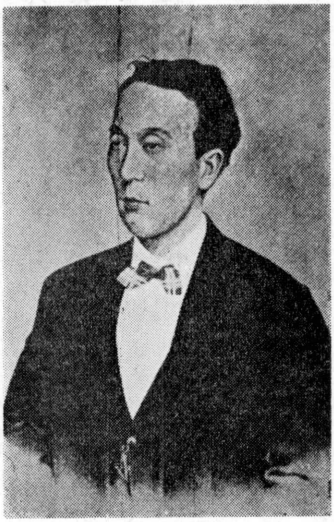
元和元年（一六〇五）浜田弥兵衛（長崎の人）が当時の南蛮の地へ渡つて眼鏡製造技術を修得してかえり、長崎に於て国産眼鏡を製造し始め、その技術を生島藤七へ伝えたという。但し、遺品が発見されないので、レンズの研磨か、フレームの製造か、その両者であるのか詳細不明である。

また、寛永一一年（一六二四）明国の僧如定が玉工ガラス研磨職人を伴つて長崎へ渡来して、眼鏡の製造を始めたとも伝えられる。

近代的眼鏡レンズの製造は、朝倉松五郎（一八四六—一八七六）にはじまる。即ち、彼は、明治六年官命によつて渡欧し、ウイーンその他に於てレンズ研磨技術を習得して帰朝して、当時の東京麹町区山下町内務省博物局構内に於てドイツ製ツオル式レンズ製造機を設置して主として凹レンズ、凸レンズなどの国産を始めた（明治七年一八七四）。

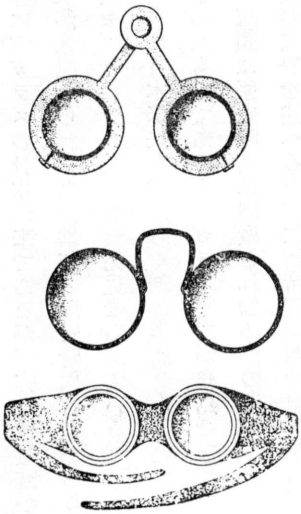
彼は、惜しくも若くして歿したので、その門弟高林銀太郎（文久？——）は一九才の若さで主人なき朝倉レンズ工

場を経営し、円柱レンズの国産化に成功し（明治一九年一八八六）、明治二一年以降は独立してレンズ製造と改良につとめ、メニスクス、張付レンズ、遠近両用レンズなどの製造を行い、日本レンズ工業の発達に貢献した。

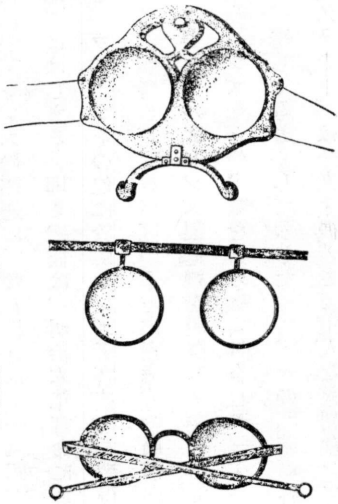


朝倉松五郎肖像

眼鏡枠の変遷



1 鉸釘眼鏡
2 鞍眼鏡
3 革帯眼鏡



4 絲掛眼鏡
5 額帯眼鏡
6 顳顬鏡

眼鏡様式の変遷

鉸釘眼鏡→鞍型眼鏡→
- オランダ眼鏡
- 釦金眼鏡
- 帽子眼鏡→耳掛眼鏡→現代型
- 前額眼鏡

鞍型眼鏡→鼻眼鏡
鞍型眼鏡→鋏眼鏡

13世紀　16世紀　17—19世紀　19—20世紀

（三）

世界で最初に作られたレンズは、恐らく片面凸レンズ

で、之れに縁（鐶）と柄（持手）とがつけられ、更らに、両眼（レンズ二個の）有柄眼鏡が出来た。次いで、持手（柄）がなくなつて、その代りに鼻根部で固定装用する原始型の鼻眼鏡が出来た。一般に鉸釘（ちようずがい）眼鏡と呼ばれているもので、二個のレンズを連結して、鼻根部にあたるところに関節があつて、使用せぬときは半折して容器に収める様になつている（関節式鼻眼鏡）。

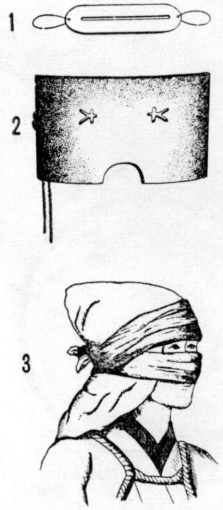
尚お、この種の初期眼鏡は、大抵、レンズを挿入してあるフレームの一部分が糸で結紮固定してある。

後述する様に、我国現存最古の眼鏡と考えられる京都大徳寺所蔵の眼鏡も、この初期眼鏡の状徴をよく保持している。

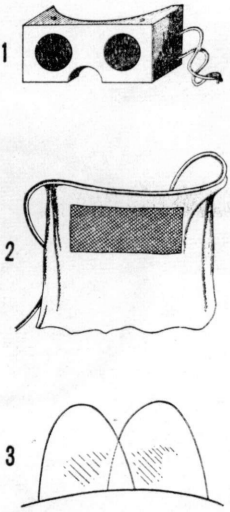
次いで、鼻根部固定法に改良が加えられ、鞍眼鏡（無関節眼鏡）が出来た。この種の眼鏡の中にも、東京品川東海寺蔵伝沢庵宗彭禅師遺品眼鏡の様に、フレームの一部分を糸で結紮してレンズを固定したものが見出される。

次いで、眼前に二個のレンズを装用する方法に就いて種々の工夫が試みられ、革帯眼鏡、絲掛眼鏡、額帯眼鏡、帽子眼鏡、釦金眼鏡などが出現した（図参照）。

欧米に於ては鞍眼鏡が鋏（はさみ）眼鏡として発達したが、東洋に於ては絲掛眼鏡が発達し、特に、我国に於ては江戸時代中期以降、俗にオランダ眼鏡と称して鼻根にあたるフレームの部分に複雑な装飾が加えられ、甚だ奇妙な耳掛眼鏡が出現した。



1. エスキモーの遮光器
2. エスキモーの遮光器
3. ふくべを用いた婦人



洋式眼鏡伝入以前の眼鏡
1. 遮風鏡
2. 面衣（面帽）
3. 遮眼布帯

（四）

西洋に於て発明された眼鏡が伝入される以前に於ても、我が国に広義の眼鏡が存在していた。

かつて、我国石器時代土偶の中に、一種の遮光器、即

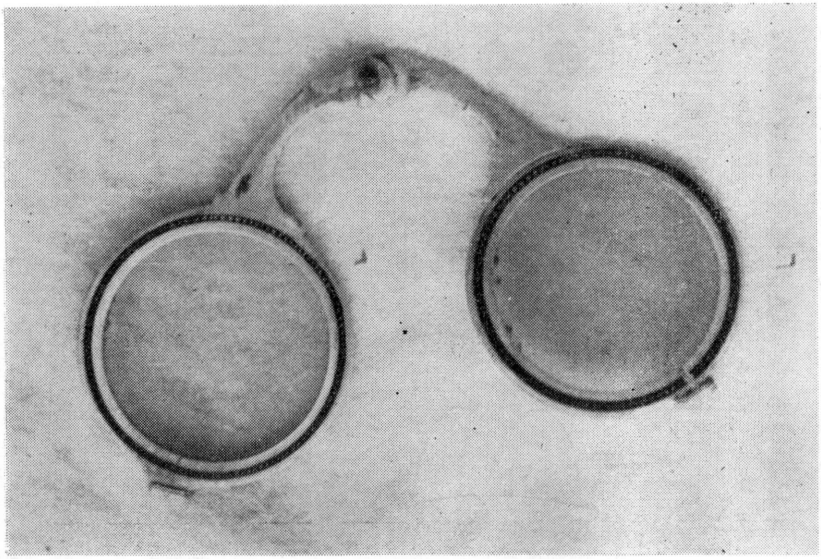
ち、保護眼鏡を装用した姿態を表現したものがあると報告せられたが、それは一種の眼部誇示異形化であることが判つた。

東北地方に於ては、日除け蟲除けの目的から黒布で顔面部を被い、眼部のみを細くあけておくものを「ふくべ」と称して使用する。一種の眼の保護装置と考えられる。

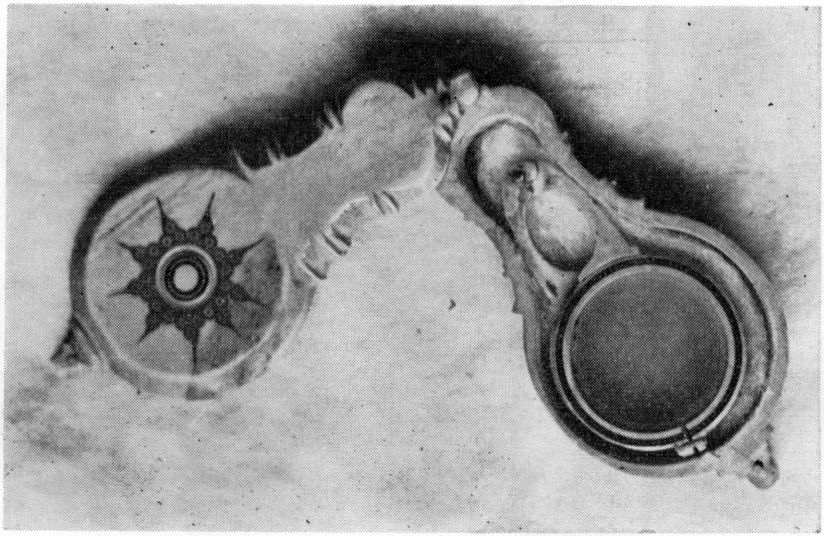
江戸時代に於ては、火事が多かつたので、消火作業中眼を保護する目的から「灰よけ眼鏡」が発案されたが、後「眼かづら」となつて、むしろ、一種の変装用具となつた。同様な眼鏡に「めすだれ」「遮眼布帯」「面衣」などがあつた。

また、江戸時代には遮風鏡（とこめがね）と呼ぶものが流行した。勿論、レンズは挿入せられてなく、時には平面ガラス、水晶の類を使用した一種の眼鏡であるが、之れを使用すると眼を保護し視力を増強するという一種の迷信から、養生眼鏡として流行した様である。

以上掲示した眼鏡以前の眼鏡は、洋式眼鏡の伝来と共に次第にその姿を消してしまつた。



京都大徳寺大仙院所蔵眼鏡
（伝第8代足利義政将軍所持）

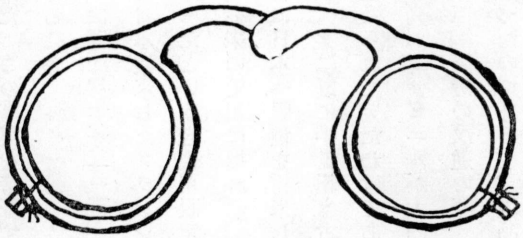


京都大徳寺大仙院所蔵眼鏡
（半折して容器に収めたところ）

（五）

我国現存最古と思われる眼鏡が京都大徳寺大仙院に所蔵せられている。

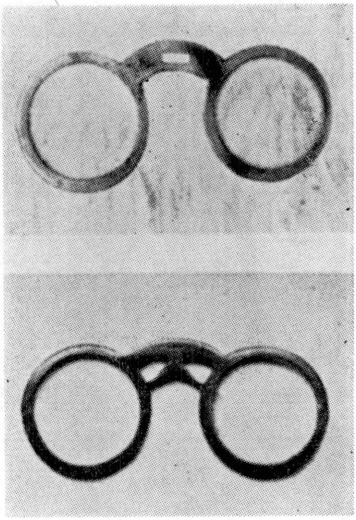
寺伝に拠るとこの眼鏡は第八代将軍足利義政（一四三六―一四九〇）が所持していたもので、それが第一二代将軍足利義晴（一五一一―一五五〇）へ伝えられ、更らに、天文年間（一五三二―一五五四）に義晴から大仙院開祖古獄宗互（一四六五―一五四八）へ贈与せられ、現在に至つたという。



大仙院所蔵眼鏡スケッチ

この眼鏡は、小型鼻眼鏡で鉸釘（関節式、或は、折りたたみ式）眼鏡である。

縁（フレーム）と附属の美麗な容器は共に白色象牙材から作られ、両方のレンズは共にフレームから脱落しない様に細糸で結紮固定してある。レンズ周辺のフレームと容器



静岡県久能山東照宮所蔵の
徳川家康の眼鏡

とには繊細な模様が彫刻してある（写真参照）。

この眼鏡に使用せられているレンズは、粗悪なガラス製で、直径二六・〇ミリメートル、厚さ約一・五ミリメートル表面の屈折度は左側約＋五・〇D、右側約＋四・〇D、裏面は何れも平面である。

尚ほ、フレームの最大外側長九九・〇ミリメートル、最大内側長四六・〇ミリメートル。

上記の眼鏡は、その型式上、明らかに古式眼鏡であつて、恐らく一四―一五世紀頃の眼鏡に属する。

また寺伝を信ずるとして、この眼鏡の所有者足利義政は一四九〇年に歿しているので、天文一二年（一五四三）ポルトガル商船が種ケ島へ漂着するよりも、約半世紀以前に既にこの眼鏡が将軍の所有となつていたわけである。

恐らく、中国（明朝）から、日本の最高統治者としての将軍へ、国交上のプレゼントとして当時中国に於ても甚だ珍品とせられた洋式眼鏡を贈つたものであろうと考える。ただ、この事実を傍証する史料を見出し得ないのが残念である。

次ぎは、天文一二年（一五四九）、キリスト教伝道のため日本渡来したフランシス・ザビエルが山口の大内義隆へ贈つたという老視用眼鏡である（天文一九年一五五〇）。

従来の史書に拠れば、「大内義隆記」の記事によつて最初に日本へ眼鏡を将来した人は、ザビエルとなつているが、実は既に半世紀も古く中国から眼鏡は日本の将軍へ贈呈せられていたわけである。

尚お、ザビエルが大内氏へ贈つた眼鏡は天文二〇年その家臣陶隆房の反逆の際、恐らく、大内氏と共に消失してしまつたのであろう、現品は見出し得ない。

その他、現存する古式眼鏡としては、静岡県久能山東照宮所蔵伝徳川家康遺品の二個の眼鏡がある（写真参照）。

是等の眼鏡は、何れも無関節式の鼻眼鏡（鞍眼鏡）で、

「大なる方」は十一・五D、「小なる方」は十二・〇Dの凸レンズが使用せられている。

其他、江戸時代中期以降に属する名士文人の使用したと称する眼鏡は多数存在するが、何れも、既述オランダ眼鏡に属し、凸レンズ使用の老視眼用である。

絵画に描かれた眼鏡をみると、名古屋徳川美術館所蔵豊国祭屏風（慶長十年頃の作）に描かれた仮装人物の鼻眼鏡は、東照宮所蔵伝家康遺品の眼鏡と同一型の無関節式の鞍眼鏡であるが、その他浮世絵人物に描かれた眼鏡は殆んど耳掛式のオランダ眼鏡である。そして、老人が装用している場合が多い。

（六）

眼鏡の歴史をその二大構成要素であるレンズと枠（フレーム）とに分けて概述し、更らに我国に於て現存している初期の眼鏡を紹介した。

眼鏡が日本へ伝来したのは一五世紀後葉の頃であつて、恐らく中国から国交上の慣例に随い珍品として足利義政将軍へ贈呈されたのが最初であろう。

初期伝来の眼鏡は、関節式鼻眼鏡であつて、其後、江戸時代初期に無関節式鼻眼鏡（鞍眼鏡）が伝来した。

其後、江戸時代を通じて耳掛眼鏡、俗に謂うオランダ眼鏡がフレームの鼻根部に独特な加飾を伴つて発達した。

（徳島大学医学部講師）

〔注〕

1　眼鏡の歴史は、種々の角度から研究することが出来るが著者は制限せられた時間の間係から、主として医史学の立場から日本を中心としてその史的発達過程の大要を述べた。

他に、レンズを中心とした光学史、レンズの研磨を取扱つた技術史、フレームの製造技術史、眼鏡の伝搬とその販売方法の変遷を取扱つた商業史など種々の史域が残されている。レンズの研磨技術、フレーム製造史に就いては、伊用徳之助著「日本眼鏡史」（昭和一〇年版）、大坪元治著「眼鏡の歴史」（昭和三五年）などに比較的詳し。

眼鏡発達の概史は拙著「日本眼科史」日本眼科全書第一巻第一分冊（昭和二九年版）に収載してある。

尚お、明治中期頃から医師が眼鏡に関心を示し、その乱用の害を説き、正しい眼鏡処方箋を発行するに至つた史実に就いては割愛した。他日稿を改めて発表する予定。

2　エスキモーが雪眼炎を予防する目的から一種の保護器を使用することが知られて、日本石器時代人も同類の保護器を使用し

たのではないかと類推された。

この項に就いては、拙著「我ガ石器時代文化遺物ノ眼部ニ就テ」実験眼科雑誌一七八号二七五頁（昭和一一年）に詳述した。

3　ガラスの歴史に就いては拙著「眼科学史から観た奈良」（「臨牀眼科」投稿中）に於て詳述した。また、奈良唐招提寺所蔵ガラス器に就いては、「唐招提寺」（近畿日本叢書、昭和三五年）に詳し。

4　盛唐時代に発達した中国ガラス製造技術は、次第に衰微に傾き、宋の紹興の頃には、中国ガラスは西洋のそれに比して遙かに劣つてしまつた。しかし、明時代に至つて、西欧人の指導によつてガラス工業は再興した。眼鏡の中国渡来とか、その中国産化もこの頃行われたものであろう。明の英宗帝の記録（正統四年一四三九）の中に、「硝子遮眼、著名矮納」の文献も認められる。中国へ洋式眼鏡が渡来したのは、恐らく一五世紀中葉以前のことではなかろうか。

5　京都大徳寺大仙院所蔵の眼鏡に就いては、前掲大坪氏の著書以外に詳報せられたものをみない。

尚お、大坪氏は同書中「足利一二代将軍義晴所持と称する眼鏡」と書かれているが、著者が実地調査の結果（詳報は「臨牀眼科」投稿中）は、足利八代将軍義政（東山殿）所持の眼鏡と寺伝にあつて、少くとも一四九〇年以前に、この眼鏡は日本へ伝来していたことになる。

6　家康遺品と伝える眼鏡に就いては、大西克知氏の詳細な調査報告があるが、是等の眼鏡は、平戸オランダ商館のカピタンセパスチヤンが鑑甲細工職の喜道にフレームを作らせ、オランダ渡来のレンズをはめて献上したという（大坪氏著書六五頁）。

7　日本眼鏡史に名をとどめた浜田弥兵衛は長崎外町代官末次平蔵政直の手代。『壮年の頃、蛮国へ渡り眼鏡造り様を習ひ伝へ来りて、生島藤七と云ふ者に教へて造らしめたるより云々』（長崎夜話草、五、付録）とあり、生島藤七は元和年間の人、長崎に住み螺鈿嵌装の名手という程度しか判らない。

8　小川剣三郎「朝倉松五郎伝」実験眼科雑誌八年五三号（大正一四年）。

9　大仙院眼鏡調査にあたつて、御紹介の労を賜つた阿知波五郎氏、写真撮影を御願した宗田一氏両氏に厚く御礼申上ます。

第六一回日本医史学会総会一般講演要旨

昭和三五年五月十五日、東京大学医学部本館小講堂において開催

偽書「薬経太素」と和気広世

石原　明

平安初期の薬物書として知られている「薬経太素」二巻は、「続群書類従」と「日本医学叢書」に収められており、「日本医学史」で富士川游氏はこれを後人の補入はあるが古態を存するとして一応真本との立場をとり、「日本医学叢書」の解題でも同じ記載をしている。小泉丹氏は「日本科学史私攷」で仏教的色彩が強く、奈良朝本草学の面目を伝えるものとしている。しかし本書を偽撰とする説は早く賀屋恭安が「好生緒言」に明記しており、近年清水藤太郎氏は「日本薬学史」で一々証拠を挙げ、内容的に江戸時代初期あたりの成立であることを主張している。今日ではもはや本書を平安時代の成立とすることは常識的にも否定されるようになつたが、演者はさらに和気広世自身医家でなかつたことを立証し、史書の記載の誤読から架空の書を作り上げたいきさつを述べ、「薬経」とは「新修本草」の薬図・図経のことであり、「太素」はいうまでもなく唐の揚上善が注を加えた「黄帝内経太素」で、両書とも当時の医学の基本書であつた事実から大学で博士がこれを講じたというにすぎないことを明かにし、「薬経太素」の成立は江戸期における典薬家の権威挽回策を暴露したものであることに言及した。

（横浜市大医史学）

「家法難波骨継秘伝」について

蒲原　宏

本書はさきに報告した高志鳳翼の「骨継療治重宝記」に

酷似した初期整骨書である。

著者は現在のところ不明であるが、明和七年に田辺秀雄が師の口授に若干の私説を加えて筆録したもので、写本として今日に伝えられている。本書は当時の整骨医間に根強くあったギルド的性格をもった技能伝習形式をよく伝えており、骨折の治療より脱臼の治療について詳しく述べている。

本書は「骨継療治重宝記」と同様、西洋の説も若干参酌はしているものの、「医宗金鑑正骨心法要旨」の影響を強く受けている。

杏雨書屋本（二冊）、蒲原私蔵本、旧山浦玄真蔵本などを資料として整形外科史的立場から本書について若干の考察を試みた。

なお本書の口授者は人屍解剖の経験があるように推測されることにも言及した。

（新潟大・整形外科）

明治初期医学校の教科書について

阿知波五郎

華浦医学校（山口県三田尻）の採用医書を中心として調査した（原書二三九部、訳書二四三部）

1　文則類は和蘭語から英語、ことに独逸語に比重が移動しつつある。

2　教養課程としての窮理書が予想外多い。ことに化学に重点がある。

3　基礎医学は解剖と薬物に重点がある。（解剖原書ホックフレスをはじめとして一〇部、薬物書イペイをはじめ七部、邦語は「医範提綱」が重点で以下九部、ことに薬物書は「理礼氏薬物学」をおもな教材としたらしい）。すでに組織学（コルニツケル、フライ）と病理学書（ヘイステル、ビルロツト、マケト）などの分科がみえている。

4　基礎医学に比べて臨床医書が少い。ワフネルの原病論、コンスの内科、ローゼル外科、ゴツフヘルス包帯

学、「内科簡明」、「外科説約」、「理学診断法」が主書。精神科、泌尿器科、耳鼻科はない。脚気、痢病、梅毒の疾病書がある。

（京都市北区小山北大野町）

ベルツ博士の序文のある著書
―江馬賤男の「新薬説約」について

安西　安周

本年三月十八日に開催されたるベルツ博士生誕百十一年記念講演会に際し、展覧された関係資料の中に、博士の遺墨または写真版のごときものは皆無のようであつた。よつて博士の序文がそのまま写真版としてでている江馬賤男の「臨床実験新薬説約」を供覧した。

本書は明治二十二年十二月十三日の出版で、著者は明治二十年の東大卒、第一医院にてベルツ博士の医局員として研究中に本書を編纂したので、博士が喜んで序文をよせたのである。なお本書は医科大学教授医学士、青山胤通校閲となつている。その他一、二特説すべきことのある小冊子だ。

（武蔵野市吉祥寺一九八四）

「蘭館日誌」中のシーボルト関係記事について

大鳥蘭三郎

シーボルトの伝記・業績については故呉秀三博士の詳細なる研究をはじめとして、その他の数多くの研究発表がなされており、シーボルト関係の研究はほぼ尽されている観がある。しかし日蘭交渉を調査する上の根本資料である「蘭館日誌」によつてシーボルトの事績を調査したことは未だなかつたので、「蘭館日誌」に出てくるシーボルト関係記事を読んだところを報告した。

シーボルトは二回日本へ渡来しているが、「蘭館日誌」に出てくるその関係記事は、はじめの時のもので、一八二三年より一八三〇年の間の「蘭館日誌」に記されている。今回は一八二三―二五年の三年間の同日誌に記されているところを報告した。

（慶大・医史学）

小石元俊著「背部十対二十穴図」について

大塚　敬節

亨和元年に小石元俊（道）が著わした「背部十対二十穴図」を昨年末、関西の某書店より購入した。この書は土佐の医家小栗玄敬が春林軒に入門中に写したものを、さらに浜田養斉が筆写した浪越運栄の旧蔵本である。

内容は『脊椎其数十二』と題する背部の十対二十穴のツボの図解に始まり、それの解剖学的位置を明確にし、それぞれに新しい命名を下し、次いでこのツボの施灸による著明な奏効を述べ、とくに神経症に善効があるとして、神経症の症状、灸灼の主治、穴名説などについて論じている。

アルバート・ウイリス（帰化名、宇利有平）のことども

鮫島　近二

アルバート・ウイリスはウイリアム・ウイリスと江夏八重子との間に明治六年（一八七四）鹿児島市に生る。明治十四年八才の時父に連れられ、タイ国経由ロンドンに帰りバクスター家の養子となり、後オーストラリヤに移住した。明治三十九年、生母が日本に健在なることを知り母を訪ねて来朝、大阪・奈良・岡山等で英語教師をしたが昭和十四年退職して奈良県生駒郡富雄村字二名に隠退した。昭和十六年大東亜戦争の直前日本に帰化した。氏は英文で私は日本文で手紙を往復した。昭和十七年十月十五日私は同氏を富雄村に訪問した。十九年逝去、また私は昨年十月遺族を西宮市に訪問した。その他、帰化当時の経緯や初対面の印象などをも述べたい。（東京・新宿・下落合一五〇）

広島における蘭学の始祖中井厚沢

赤松　金芳

中井厚沢の伝記については、わずかに「新撰洋学年表」「芸備医志」「本邦著名医略伝」その他によると、厚沢は安芸宮島の人で、名は潤といい、星野良悦に学び、寛政の

初年江戸に出で大槻玄沢の門に入り蘭学を修め、宇田川玄真にも教えを受け、ついで大阪、或は京都に行き、さらに長崎で吉雄耕牛について昇汞製法を習い「升汞丹製法秘訣」を著わし、のち広島に帰り蘭学塾を開いた。その時の門人に坪井信道、岡研介、新宮凉庭などがある。厚沢はまたオランダ初期の薬物の一つであるビリリについて考察を加え、それが芦茶を主成分とするヘイラ・ピクラであるとして「粥離力考」（一八〇七）を書いたということである。そして厚沢が長崎にあるとき蘭医フェイルケにつきビリリについて真偽を問いただしたという。しかし厚沢の生歿年については、確かなことは未詳である。（昭和薬大）

大阪町人の合理主義と西洋医学への理解

中野　操

大阪町人の代表者として特に山片蟠桃を挙げて、その西洋医学への理解と医学思想について論じた。

（関西支部長）

和蘭伝来ルザラシについて

伊良子光義

寛　六年（一七九四）甲寅十月朔日、わが先代光顕がオランダ伝来の『ルザラシ』の一片を入手、これが今日に至るまで保存せらるるを以て、その本体を究明せんとす。

『ルザラシ』は古書に椽歴また留左良支と書し、薬効としてその当時瘧（マラリヤ）の特効薬として珍重せられたるもので、また入手甚だ困難、稀貴な薬品という。

原木の原産地は不明なるも、オランダに輸入せられ、寛政当時わが国に渡来せるものの如く『猥勿服』と訓告付にて密封保存せらる。

文献として「大和本草」十二巻下、木部四十三丁に、性状・用量・用法・薬効等詳細に収載せり。

いまこの原木についての考証、並びに化学的究明を発表せんとす。

（滋賀・近江八幡市十王町）

蘭方製薬史（第四報）

宗　田　一

長崎出島のオランダ商館付医官から学んだ医術については、それらの修業証書に『薬油之取様』の項があるので、製薬法は必須課目であつたと思われるが、それら製薬法は何れも秘伝書乃至はそれらの抄写本として伝わつており、後人の追補などもあるので、その系統を明らかにするのはなかなか難事である。

今回はそれら蘭館医の名の明確なものについて、数例の製薬法を紹介した。

とくに寛文十二年（一六七一）三月十三日に長崎オランダ通詞数名が、奉行所の命によつて蘭館付薬剤師から学んだ製薬法およびその装置の詳細は、報告書として江戸幕府に提出され、またその伝写本は弘く流布し、爾後百年以上に亘つて蘭方医に利用され、本法がながく基範とされたので、この日は製薬技術史上注目すべきものであることを強調したい。

（大阪・吉富製薬バイエル薬品部）

日本における膵臓の認識（予報）

矢　数　道　明

膵臓という臓器は、古来東洋医書には全くその名称がなかつた。オランダ医学が輸入され、その解剖書が反訳され、実際に解剖が行われるに及んで、従来の中国医学の解剖図に大改訂の必要に迫られ、初めて膵臓が日本の医学上の問題となつたものである。江戸時代日本医学史上、この膵臓は如何なる経路を辿つて認識されて来たか、文献的にこれを考証し、かつ東洋医書に記載されていながら、近代解剖書にその名の脱落している『三焦』という臓器と、この膵臓との関係について考察を加えてみた。（東京医大）

記主禅師の看護観

杉　田　暉　道

浄土宗の第三祖である記主禅師良忠は、従来あまり教化されなかつた関東地方に宗門の勢力を拡張され、また浄土

教学をも大成されて、宗門に偉大な貢献をした人として有名であるが、この上人の著作といわれる「看病用心抄」は、全篇を十七章に分けて病人の看護法を詳しく述べている。

即ち全篇を通じて病人を精神的に安らかにするには念仏の功徳によることを強調しているのである。ここに書かれている看病の実際の心得は、現今においても注目すべきものがあるので、これらについて述べた。

（横浜市大・公衆衛生）

日本医史学会刊行物一覧

○医学古典集

1　勧医抄　望月三英原著　原田謙太郎校訂　四五〇円

2　松香私志　長与専斉原著　山崎佐校訂　五〇〇円

3　造物余譚　三浦梅園自筆稿本影印
越俎弄筆　中井履軒自筆本影印
小川鼎三解説　六〇〇円

4　以下続刊、東京都文京区駒込片町三六
医歯薬出版株式会社刊　同社取扱

○資料でみる近代日本医学のあけぼの
第一五回日本医学会総会記念　限定版　原色版付全図オフセット　英文解説付　石原明解説　二七〇〇円
東京都千代田区有楽町一の四　株式会社便利堂東京出張所取扱

上記以外の本会刊行物はすべて絶版です。

第六二回日本医史学会総会一般講演要旨

昭和三六年十一月十一・十二日、京都市立植物園会館講堂において開催

Avicenna の〝医術の詩〟について

巴陵宣祐

一九五六年にアルジェ大学の H. Jahier 及び A. Noureddine の両氏によつて、Avicenna の有名な〝医術の詩〟(Urguza fit-Tibb, Cautica) の現代フランス語の訳文が、アラビア語のテキスト及びラテン語訳文とともに一緒に印刷されて出版された。これによつて私どもは、〝医術の詩〟の内容がどんなものであるかを親しく知ることができるようになつたのである。このことについて述べてみた。

(富山・高岡市下河原町)

東西医学の源流と交流

三木栄

人類が発祥し繁殖して来ると、外傷や疾病の発生も多くなり疫病も流行する。医術が生まれ、医なる学問も次第に発達するようになる。この根源、もとの派れについて述べ、次いでこれが変遷し凡そ東洋医学西洋医学と二大別されるに至つたのは如何なる所以か。この両医学の比較交流は現代まで如何なる形になつているか。それの本質は如何なるものか、について、演者は、自分の数種の論稿を通して考え、説いたのである。

(堺市熊野町)

「医家千字文註」が中世医学に占める地位について

石原　明

永仁元年（一二九三）に当時典薬権助であつた惟宗時俊が作つた「医家千字文註」は、江戸時代中期に上木され、幕末に至つて「続群書類従」に収められて世に流布しているが、本書は鎌倉時代の医学の傾向を示す異色ある文献であることを改めて考察したい。

それはすでに勢力を失いつつある宮廷医家が、隋唐医学の真面目を初学者に理解させる目的、すなわち世襲として家学を伝承するために新興の宋医学を専門とする医家におくれをとらぬよう、家学を再編成するために初心者向の一種の教科書として暗記に便利な体裁をとつたものと考えられる。その奥書によつて当時の医学教育の一班をうかがうことが出来、撰者の努力のあととその文才が明らかに認められ、熱意のほどが察せられる。鎌倉時代の代表医書として「万安方」と対比することにより、中世の医界の実情を考察した。

中華共和国における最近の李時珍研究

石原　明

「本草綱目」の著者で革新的な本草学者であつた李時珍（一五一八―一五九三）の生涯については、従来あまり知られず史料も乏しかつたのであるが、戦後、伝統医学の復活にともなつて伝記研究が盛んとなり、一九五四年頃よりいくつかの伝記が出版された。そしてこれに基いたシナリオも書かれ、李時珍の医師としての活動も明らかにされた。郵便切手にまで肖像が用いられており、モスクワ大学には石像までおかれている。

演者はこれらの最近の出版物を供覧し、李時珍伝の研究が中共においてどのように進められ、李時珍がいかに評価されているかについて発表した。（横浜市大・医史学）

「杏隠斉正骨要訣」について

蒲　原　宏

吉原元棟の「杏隠斎正骨要訣」は筆録され広汎な流布がみられるが未だ刊本は認めない。

既見の一八冊をもととした考察の結果本書は上巻のみで下巻は編述されなかつたものである。

本書は杏隠斎の門人播州竜岡藩の和田鎌堂・讃州丸亀藩の綾含弘が編録し、長州の村英仲も参劃しており、寛政三年から寛政一〇年の間に編録されたと推定される。

「吉雄流正骨書」は全く杏隠斎正骨要訣そのものであることはすでに医史学者の認めるところで、阿知波氏蔵井上重貞本、長崎県立図書館本はよくその真相を伝えている。

京都の竹中信（思順）の著として流布している「済春園正骨要訣」の一本は全く「杏隠斎正骨要訣」の剽竊本であることに根拠をあげ述べた。

「杏隠斎正骨要訣」は四肢大関節の脱臼整復法を主としており、近代解剖学に立脚せず、かつその「要訣」の字義のごとく口伝・秘伝々授の教授型式をとつたため、発展性と独創性がゆがむ結果となつたものである。

四肢骨関節筋靱帯の機能的解剖学及び生理学的知識の欠除は本邦の十八世紀正骨術における一大欠陥であり、近代的な合目的な治療法に発展しなかつた原因でもある。

さらに「杏隠斎正骨要訣」の術式の案討を行つた結果について述べた。

（新潟大・整形外科）

京都における駆梅用水銀剤製造研究史

―蘭方製薬史第五報―

宗　田　一

わが国の駆梅用水銀剤は漢方系の軽粉、粉霜、生々乳と蘭方系のソツピルズブリマートなどがならび行なわれ、漢方・蘭方のそれらのうちで組織が同じものでも区別し、混用されなかつた。

蘭方系のそれはツュンベリー渡来以後に本格的使用研究がはじまり、京都でも比較的早く安永年間稽林由仙（鎮山の弟由意の子孫――京都系稽林で従来注目をひかなかつた

医系）らがその製薬を行なつているが、寛政年間橋南谿が漢方系のそれを江戸の研究に準じて研究しはじめ、文化年間に至り、中井厚沢、辻蘭室、中川修亭らの研究によつて、ようやく本格的製造をみるに至つた。

演者は本報において、蘭方系のそれの京都移入から本格的製造研究に至る過程を、漢方系のそれと対比しつつ考察してみたい。

（大阪・吉富製薬）

「蘭館日誌」中に見らるるいわゆるシーボルト事件関係記事について

大鳥蘭三郎

いわゆるシーボルト事件は興隆期にあつた蘭学界にとつてきわめて大きな衝撃を与えたものであつた。この事件については故呉秀三博士の研究がことにくわしく、多くの資料を用いて細かな見解を発表されているが、「蘭館日誌」に関しては呉博士は何も言及されていない。シーボルト事件については、一八二九年と一八三〇年度の「蘭館日誌」にかなりくわしく記されている。この事件を当時オランダ側がどのように考えていたか、その一端を紹介してみた。

（慶大・医史学）

幕末における外国船々員患者の治療について

中野操

幕末のころわがくにの沿岸に漂着した外国船の乗組員中に病人があるときは、該船を長崎に廻航せしめ、病人を上陸させて奉行所監視のもとに、柴田方庵、楢林宗建らの町医に診療させたものである。方庵の手記にもとずいてかかる外国船々員患者の治療についてのべた。（関西支部長）

福沢諭吉と蘭学事始

内山孝一

明治二年（一八六九年）正月、初版本の「蘭学事始」が上下二巻として出版される運びとなつたのは福沢諭吉に負

うところが多くあつた。この事情は明治二三年に日本医学会が再版を刊行したとき、それに寄せた福沢諭吉の序文によつて明らかになつた。

演者は先きに和蘭事始を校訂し解説をつけて出版したときにも蘭学事始初版本と福翁との関係について触れておいた。

その後、福沢家から福沢本が発見され、また幸田成友博士の蔵書の中から幸田本が発見された。この間の事情は、すでに富田正文氏が論述されている。

私はここに更めて蘭学事始と福翁との関係について再び考えて見て、前に述べたことを補うとともに、私のこのことについての考えについて述べ、識者の批判を得たいと思つてこの演題をえらんだ。

（日大・生理）

わが国における初期結核療養所

長門谷洋治

結核に対するサナトリアム療法は一八五九の Herman Bremer に端を発するが、わが国では一八八九（明二二）鶴崎平三郎の須磨浦療病院のそれが最初とされている。これは Peter Dettweiler 1876, Edward L. Trudeau 1884 より遅れてはいるものの、世界的にみてもかなり早いものである。なお鶴崎が Bremer の影響を受けたことはたしかであるが、その後も常に最新の療法をとりいれて堅実な発展をとげた。一八九二には鎌倉病院が、翌一八九三には米のペンシルバニア女子医大を卒業、帰国した岡見京子が東京で〝衛生園〟を創始、その理想的運営を行なつている。その後もわが国にはあいついで結核療養所ができたが、いずれも個人経営の小規模なものであつた。わが国において一般病院が教育機関あるいは政府、都道府県と密接な関係をもつて発展したものが多いのに対して、結核療養所は個人の努力、宗教的見地、あるいは外人により（例えば近江療養院）創立されたものが多い点は注目すべきである。そしてドイツ最初の公立療養所の創立（一八九二）にかなり遅れて、わが国では一九一七はじめて公立の大阪刀根山病院ができ、ここにわが国の療養所はひとつの転換期を迎えることとなつた。

（大阪・日生病院）

尾州藩医浅井氏家譜大成と浅井系図について

矢数道明

尾州徳川家の藩医として十代に亘って継承された浅井家は、家学として素霊の学を講じ、後世派的色彩をおびるものが多かった。

十代目を継いだ浅井国幹が、晩年克明に書き綴った浅井氏家譜大成は、その家学の伝承を知るに足るものであり、歴代継承によって書き込みを行っていたという浅井系図は、名門浅井家としての連綿たる伝統を一目瞭然たらしめる好個の資料である。

国幹は愛知博愛社、東京温知社、帝国医会を通じ、二十四年の長きに亘って漢方医術存続運動のため身を挺し、悲劇を一身に背負って生涯を終った。

即ちこの二資料と、国幹の「墓に告ぐる文」とを併せみるときは、江戸時代より明治中期に及ぶ、漢方医学興亡の一貫した変遷がみられるのである。（東京医大・薬理）

野口英世の邦文著書「十二指腸虫病」について

安西安周

本書は大正三年一月十四日、内務省衛生局の発行になったものであり、その著述の由来は、左の序によって明白である。

「往年米国ニ於テ十二指腸蟲病患者入国拒絶問題発生ノ時ニ当リ米国駐剳珍田大使ハ由来米国南部諸州ニ於ケル該病蔓延ノ状況ニ鑑ミ其ノ治療及予防上本邦医家ノ参考ト為ルヘキ資料ノ蒐集ヲ企テ之ヲ紐育ろっくふえら医学研究所伝染病部次長医学博士野口英世氏ニ謀ルヤ氏ハ大使ノ意ヲ体シ先ヅろっくふえらーノ組織セル米国十二指腸蟲病撲滅委員会学術部長ぶろふえっさー。すたいるす氏ニ就キテ其ノ意見ヲ徴シ且自余専門家ノ報告書等ヲ参酌シ自ラ筆ヲ執リテ論文一篇ヲ草シ以テ大使ニ呈シタリ之レ実ニ本書起草ノ顚末ナリトス云々」

（武蔵野市吉祥寺一九八四）

日本放射線医学史上における室馨造と福田雋一の業績

今市　正義

日本放射線医学の発達段階における一時代、すなわち大正の前後から昭和の初頭は、この学術を安定させる多くの因子を生んだ。そのひとつ、放射線発生装置の国産化は、電気事業の飛躍的な発展に助長されて実現した。電気工学者としての室、福田は、学界の示唆をどう感受し製品の面に表明したかを解説する。

（徳島市明神町六の一〇）

編集後記

種々の事情で長い間刊行が出来なかった日本医史学雑誌を、ようやく復活することが出来た。数年のブランクをとりかえすため本号は二号合併として第六一回と第六二回の総会の一般講演要旨を一括して印刷とした。巻頭の原著は第六二回総会における特別講演の書下し原稿であるので、要旨は省略して全文を以て原著にかえたので御了承願いたい。

第六一回総会の特別講演は別の機会に原著で発表される予定である（石原）

日本医史学雑誌　第九巻三・四号
昭和三七年三月二五日印刷
昭和三七年三月三一日発行
発行所　東京都板橋区大谷口日本大学内　日本医史学会
編集者　横浜市中区長者町三の三二　石原　明
印刷所　東京都北区神谷町二の四五　大洋印刷産業株式会社

絶版お知らせ

かねてより御好評をいただいておりました拙著「医史学概説」は、昭和30年発行以来医史学入門書として各大学の教科書としても採用され，諸先生方より過分の賛辞をいただきまして私共としては身に余る光栄と心から感謝しております。

さて昨今在庫もいよいよ僅少となり、各方面より増訂再版のおすすめもありましたが、御承知の如く近年における斯学の進歩は、とうてい巻末に増補する程度では十分でなく、本文中におきましても新資料の出現などで根本的に書改めなければならない状態にあります。従って旧著を今日の役に立てるためには、全面的に書下しの余儀なきに至りました。短時日の間に周到な用意をもって満足すべき著作を世に送ることは、著者の微力如何ともすることが出来ず、全く不可能の状態でありますので、この際、著者と発行者と協議の上、在庫部数限りで一応絶版とすることとし紙型を破棄いたしました。

ここに絶版のお知らせとともに今後適当な機会をみて新著を刊行すべく一層の精進を続ける覚悟でございます。何分とも事情御諒察の上益々御支援御指導のほど偏えにお願い申し上げます。

1962年3月

著者　石原　明
発行所　医学書院

在庫僅少

医史学概説

横浜市立大学講師　石原　明著

A5判. 358P. 索引 24P. 原色版口絵　図版145個. 上製本

¥ 1,300

東京都文京区本郷6～20
発行所　医学書院
振替 東京 96693

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the

Japanese Society of Medical History.

Vol. 9. No. 3・4. Mar. 1962.

CONTENTS

Original Articles

Studies on the history of the spectacles in Japan..... Giichi Fukushima.....(71)

General Report

The 61th General meeting of the Japanese society of medical history (May, 1960. Tokyo) .....(81)

The 62th General meeting of the Japanese society of medical history (Novenber, 1961. Kyoto)...(88)

Book review .....(87)

The Japanese Society of Medical History

c/o Department of Physiology. Nihon University.

School of Medicine. Itabashi, Tokyo.